日本一の雁木の街で、高田瞽女（ごぜ）の生き方に学ぶ

特定非営利活動法人　高田瞽女の文化を保存・発信する会［新潟県上越市］

団体設立の経緯

2008年春、画家斎藤真一の研究者である池田敏章氏（北海道恵庭市）が上越市に来られて、160点余りの斎藤真一作品と多くの資料の寄贈先として高田(上越市)も候補のひとつにあげられました。これを機に市民の中から、「是非とも寄贈を受入れたい」という機運が生まれ、その秋に署名活動を始めたことが、当会の発端です。

その斎藤真一独特の作品の中には、盲目の女旅芸人【瞽女】が、深い情念をたたえて描かれています。彼女たちは、高田の雁木のまちに家を構えて、毎年300日近くは旅に出ていました。瞽女という存在を知ってはいましたが、これを契機にして、その真摯な生き方を改めて理解することとなりました。瞽女と瞽女を支えた人々から、斎藤真一画伯と池田敏章さんに引き継がれた想いを、高田の歴史財産として受け継ぎ、伝えなければならない。この気持ちが引き金となったのです。

地域概要

東西南北約2キロ四方の上越市高田地区の旧市街地は、400年前に城下町が開かれて以来、まちの骨格はほぼそのまま残されています。特に町家の連なる街道筋には、「雁木」の街並みが連続して、日本海側の豪雪地に特徴的な景観を残しています。雁木は道路沿いの私有地に架けられた屋根付きの歩廊が続くもので、だれでも歩くことができます。車社会と暖冬傾向と中心市街地の衰退を経て徐々に減っては来たものの、大雪の時にはその役割を実感します。

当会の活動拠点は、信越本線高田駅（北陸新幹線開業後は第3セクターに移管）の北東の一角にあり、以前から雁木の街並みを活かして、市民主体の様々な活動を実践しています。

高田世界館再生活用と雁木町家の景観向上活動とも重なる地域で、小学生向けの総合学習支援や街なみ観光のプログラムも蓄積してきました。さらに、瞽女の文化が雁木のまちと周辺の村々をつなげることを知ることで、上越地方全体の長い歴史を重層的にとらえることができます。

設立年月 ･･･2008 年 9 月設立　2013 年 5 月法人化
メンバー数 ･･･ 役員 9 人　登録会員数 145 人
代表者名 ･･･ 会長　市川信夫（いちかわ・のぶお）
連絡先 ･･･ 〒943-0832　新潟県上越市本町 7-3-22　きものの小川気付　小川善司
☎ 025-522-3400　ogawazenji@gmail.com　http://www.takadagoze.info/
団体のミッション ･･･ かつて越後高田に暮らした盲目の女旅芸人『瞽女』は、都市と農村を結ぶ絆でした。
私たちは斎藤真一作品の常設展示を契機として瞽女文化の意義を継承するとともに、
雪国高田の雁木町家地域の活動を発信していきます。

瞽女の年中行事であった「妙音講」にならい、本会でも折々に瞽女唄を奉納しています。

活動に至った理由や背景

作品受け入れの署名活動と上越市への陳情が実り、2011年に絵画作品と多くの資料は、池田敏章コレクションとして上越市に寄贈されて、その翌年には総合博物館で「斎藤真一と瞽女」企画展が開催されました。当会の第一の目的は達成されたわけです。しかし、「これらの作品にこめられた想いを、多くの人々が共有できること」すなわち「常設展示」については、上越市との協議が煮え切らない状態で、依然として模索しています。

この間に、瞽女文化の顕彰と記録の整理、市民への啓発活動を継続して、市民自らが瞽女文化の再評価に動き始めました。もちろん全国からの研究者と愛好家も、再び高田瞽女に注目しています。

来年はこの地に城下町が開かれてから400年、2015年春には北陸新幹線が長野から金沢まで延伸し、上越妙高駅が開業します。雁木のまち高田に生き続けた瞽女の歴史を、地域の誇りとして語り継いでいくために、私たちは大きな一歩を踏み出したと考えます。

昔から変わらない瞽女の旅姿ですが、履物は戦後、ワラジから地下足袋に変わりました。

まず瞽女資料の整理

50年前の瞽女ブーム以来、「瞽女について知りたければ、最後はやはり、高田の市川先生に聞くしかない。」と言われてきました。親子二代で瞽女を支えてきた市川家には、詳細な資料と貴重な写真が保管されています。さらに、様々なジャンルの研究者たちの成果も増加中。それらを整理、公開していくことは、斎藤作品の鑑賞とあわせて、瞽女文化の理解を助けてくれるでしょう。本会で資料を預かり、画像データにするとともに、先生の解説を追加して保存整理作業を始めました。しかし、膨大な量なので、少しずつ進めています。

在りし日の高田瞽女。親方の杉本キクイさん（左：1898～1983）は最後の親方でした。

上越市への寄贈を願う署名運動も行い、池田さんとの信頼関係を深めていきました。

斎藤真一作『あげ石瞽女・神保瞽女一覧』（1971年 越後瞽女日記）
「越後瞽女日記」には、詳細な瞽女宿の地図と記録が円熟期の作品とともに紹介されています。

©SUZAKUIN

1年前から：雁木町家に拠点を整備

昔ながらの町並みが残る雁木の通りに、瞽女の親方は一家を構えて弟子たちと暮らしていました。明治中期の記録には、17軒で89人の瞽女の名前が残っています。ですから、瞽女の資料館と斎藤真一ギャラリーを合わせて、雁木と町家の一角に設置することが、本会の次の目標になりました。

高田城址公園内にある博物館は、確かな保管場所ですが、残念ながら、池田コレクションの常設スペースを設ける余裕はありません。市財政の厳しい状況から、新築も困難です。むしろ瞽女が暮らした雁木の町の中で、その記憶をたどりながら、本物の作品に触れるほうが相応しい。本会では当初からそれを目指していました。

しかし、町家は個人の資産ですから、所有者と本会の思惑がすれ違い、最初の候補町家は白紙に戻りました。改修費用だけでなく、維持運営の資金繰りも大きな課題です。

一方、寄贈作品の貸出しを受けるには、防火、防犯対策と展示環境の整備も必須です。既存の町家を改修して、ギャラリーとして活用している事例を調べつつ、徐々に改善していく方針を立てて、「麻屋高野」を資料館として活用することで、再出発しました。

昭和10年築の「麻屋高野」は、昔は麻商品を扱う問屋兼住宅で、吹き抜けと中庭のある典型的な作りです。所有する高野さんも、10年前から、積極的に町家の活用を図ってきました。建物は登録文化

間口3間の「麻屋高野」は昭和10年築。周辺一帯が大火で焼け落ちた後に再建されました。

冬の雁木町家で、瞽女の門付け風景を再現するイベントを行っています。

8月には樽本峠を越えて、飯山方面の瞽女宿を調べてきました。昔の懐かしい日々が甦りました。

財であり、文化庁の補助事業や上越市の助成整備事業の基本的な条件をクリアできます。設備面での条件整備には多額の費用を要しますが、技術的に不可能なことではありません。

一方、日常的な町家の手入れと維持管理も欠かせません。関係者一同で障子の張り替え、建具のガラス交換、照明器具の埃掃除と不用品の分別と片づけを実施しました。丁寧に掃除していても、大きな家には、いつしか多くのモノが溜まります。家族の歴史、商売の記録と道具、昔の雑誌など、時代を語る品々が多いので、一度に処分せずに、今後も整理を続けます。4月には、地震で外れた石灯籠の復旧や樹木の枝払い、雑草と灌木の手入れなどの中庭整備を行い、かなりすっきりしました。

まちづくり活動の発信地

この10年間の活動を通じて、雁木の門付け風景の再現と町家の瞽女唄演奏会、あわゆき組の一日限定甘味処、雪の高田と温泉満喫のモニターツアーなど、各種ソフト事業の成果を積み重ねてきました。

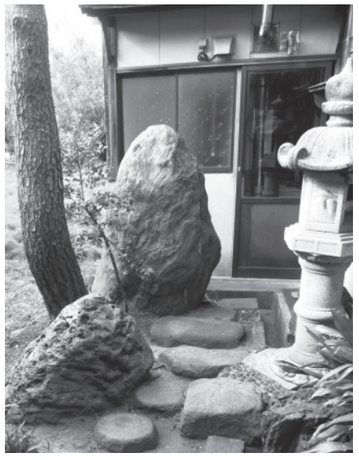
6年前から、機会あるたびに開催してきた町家の斎藤真一作品展で、池田さんは、和の空間での展示に好印象を持たれました。そういえば斎藤真一画伯は、ご自身の著作で、「蔵のような小さな空間の壁のくぼみの中に飾ってみたい。」と書かれています。高田の大きな町家にも、土蔵があるのです。

大きな美術館ではないが、歴史を伝える雁木の町家で作品を鑑賞する。瞽女の生き方に触れる資料を探す。瞽女唄と三味線を習ってみる。雪国らしいしつらえの座敷から、雪化粧した中庭を眺め、お茶と手作りの甘味で一休み。一度は味わってみたい情景です。それを実現するために、努めていきましょう。

もちろん、「麻屋高野」は昭和の暮らしぶりを体験できる町家としても、公開の価値があります。本会の事務局でもある「きものの小川」、日本最古の映画館「高田世界館」、上越市の町家交流館「高田小町」、そして雁木景観の保全と整備に熱心な大町5丁目につながり、高田駅から雁木界隈へのまち歩き観光の拠点に位置します。大町通りには定期朝市が開かれますので、人情味あふれる人のぬくもりが実感できます。

来春の北陸新幹線の延伸開業後は、上越妙高駅から高田まで、第三セクターの鉄道をご利用ください。関西方面からも、瞽女に関する情報に注目する方々が増えています。

左:障子紙張り替えのボランティア作業。大坂格子と呼ばれる町家独特の建具があります。
右:大雪のあとには、樹木が傷つきます。今年は中庭の木と石灯篭をすっきり。



2013年夏 瞽女の道から縁が広がる

斎藤真一は、杉本キクイからの聞き取りを基に瞽女宿を訪ねて農山村を廻りました。「越後瞽女日記」(1975年河出書房新社)に見られる綿密な瞽女宿の地図と記録は、私たちにとって教科書にあたります。

しかし、それから40年余を経て、まだ瞽女宿はあるでしょうか。瞽女を知る世代は、既に80代以上が大半です。今のうちに、その話を聞き、その記憶を記録に残さなければ、早晩消えてしまうでしょう。時には60代の方が、「親から瞽女のことは聞いている」と話してくれました。記録として残すことの意義は大きいのです。

本会では、5年前から瞽女ゆかりの地を巡るバスツアーの準備を兼ねて、近郊の瞽女宿を調べてきました。さらに昨年の夏には、長野県北部に抜ける峠道をたどり、途中の村々で昔の瞽女宿を訪れ、話を聞くことができました。斎藤さんの著作に記載のない瞽女宿も数軒見つけました。若かった日々、瞽女との思い出を生き生きと語るお年寄りの笑顔に、こちらも力づけられました。また、本会会員の田辺さんは、独自に綿密な調査をしていましたが、その成果資料と写真を提供してくれました。瞽女さんのご縁に感謝します。

(注) この調査記録は文化庁の補助事業として小冊子に整理して印刷製本を行いました。

時 瞽女の縁が
を超えて人々を結んでゆく。

瞽女の年中行事であった「妙音講」にならい、
本会でも折々に瞽女唄を奉納しています。

2013年秋
タクシー会社に
出前講座

瞽女宿の調査から、高田瞽女の晴れ舞台は農山村の瞽女宿にあったことを、改めて知りました。地元高田では、その真髄に触れる機会が少なかったので、説明できる人材が不足しています。本会の市川会長と小川事務局長のコンビで、数多くの出前講座と案内を実施してきましたが、もっと多くのガイド役が必要です。

そこに、地元タクシー会社の社長さんから「高田開府400年と新幹線で観光客が増えるから、瞽女について基礎的なことだけでも説明できるように、社員向けの基礎講座を開きたい」と申し入れがありました。

早速、小川さんが資料を作成して、タクシー会社の全従業員に向けて、3日間の講座を実施しました。直接ガイドを行う運転手だけでなく、従業員全員が交代で聞いてくれました。

上:タクシー運転手も大事なガイド役になります。高田瞽女の基礎講座で勉強会を行いました。
下:門付けの時に、登録文化財「麻屋高野」を公開し、ツアーのお客様にも見学していただきました。

2014年春
瞽女の文化で
広がる交流

瞽女唄の継承者は、新潟だけではありません。本会と縁の深い東京の月岡祐紀子さん、長岡瞽女の小林ハルの弟子である萱森直子さんの二人が、3月の倉敷音楽祭に出演することになりました。倉敷は斎藤真一氏の故郷（旧味野町）でもあります。池田敏章さん、関西方面の会員、斎藤画伯に縁のある人々が集まる機会に、本会から4名が参加しました。音楽祭では越後瞽女唄のほかに、越中おわら節と五箇山民謡が披露されて、立ち見の出る盛況でした。

倉敷駅から歴史的な街区を歩いたことも大きな成果でした。倉敷の街並み景観は線だけでなく、面的な保全が行われています。伝統的街区以外も近代建築の名作が立ち並び、偏差値の高いところ。10年前なら、高田との格差を思い知らされるだけだったと思いますが、今は、もう少し客観的にとらえることができました。

「高田なりの蓄積があり、一目で伝わらなくても、時間と共に気づく魅力があるし、外見の整備はじっくり考え、あきらめずに進めて行こう」と。それにしても、倉敷国際ホテルや市民ホールなど、近代建築の遺産は大切にされていて、倉敷の地域力を感じました。

左:1泊2日の弾丸ツアーで倉敷音楽祭に行きました。越後瞽女唄は、本会なじみの月岡さんと、新潟の萱森さんの二人が力強い演奏を披露しました。
片道7時間余りの旅であっという間の2日間でしたが、池田コレクションが、倉敷でなく、上越に寄贈されたことをかみしめ、これからのことを思いながら帰途につきました。

上:ツアーのお客様を案内する本会事務局長の小川さん。市川先生に次ぐ瞽女の語り部です。
左:市川先生と小川さんのコンビで、市内各地の学習会で、出前講座を開催しています。

高田で最後まで瞽女として生きた三人の瞽女さん。馴染みの村人たちとの交流を描き、雁木の町で暮らす日常を記録した映像と瞽女唄から、私たちが見過ごしてきた大切な何かが、浮かんでくるようです。
記録映画《瞽女さんの唄が聞こえる》
監督　伊東喜男

そして、これから

まずは、今年度中に「麻屋高野」を「斎藤真一ギャラリーと瞽女の資料館」としてスタートさせるために、上越市の助成事業を活用し、一般にも寄付を呼び掛けて改修工事を進めます。運営経費は、文化庁の補助事業に申請しましたが、次年度以降はこれからです。発信を続けて実績を重ねていかなければなりません。資料整理と作品展示は、関係者に呼び掛けて相互協力を続けていきたいと考えます。寄付募集の案内状を作成しました。

歴史的な街なみの価値を見直し、歴史的建物をまちづくり・人づくりに活用する動きが増えています。機会を得て、交流を続けていきたいと考えます。瞽女宿の記録調査は、さらに長野から上田、佐久方面に範囲を広げていきたいと考えます。

一方、貴重な資料も増えました。1970年に杉本キクイ親方が、文化庁から瞽女唄の無形文化財保持者に選定される際、その選定資料となる録音テープがありました。市川信次氏（民俗学者で市川会長の父）が、キクイ親方に様々な事柄を聞く形で録音されましたが、最近、文化庁がCD化してくれました。生前の二人が冗談を交えながら、和やかな高田弁で語る中に、互いの信頼と尊敬の気持ちが伝わります。キクイ親方のおっとりした口調は優しく響き、人柄が感じられます。市川先生がワープロによる文書化に取り組んでいます。

また、静岡県沼津市にも、大きな瞽女の組織があったということで、市内の寺院にお墓と過去帳が保管されているそうです。瞽女唄の音楽性から研究されたジェラルド・グローマーさんの著書に紹介されています。最近、地元の若者たちが、新しい視点で活動を始め、高田瞽女にも注目して、記録映画と瞽女唄の演奏会を行っていると聞きました。近いうちに、交流の機会を持ちたいと考えます。

このように、瞽女の縁で、日々新たな交流が広がっていきます。『瞽女』という言葉を聞き、文字を見かけたら、是非、思い出してください。